

「笑い」から見たホメーロス

生 田 康 夫

はじめに

「ホメーロスの笑い」という表現がある。英語で *homeric laughter*、フランス語なら *rire homérique* と言われるものだが、これはどんな笑いを指すのだろうか。辞書などでは、「消えやらぬ笑い、とめどもない笑い」などの意味であるとされている。しかしこの「消えやらぬ」とか「とめどもない」という説明は笑いの外形的定義にすぎない。ホメーロスの両詩編の「ホメーロスの笑い」の表現のもとになった詩行において、その笑いの中身、含まれた意味合いは何なのか。笑いには色々な種類がある。「ホメーロスの笑い」とは一体どのような種類の笑いなのか。

そして『イーリアス』および『オデュッセイア』には、辞書

的な意味での「ホメーロスの笑い」の範疇に留まらない様々な笑いがある。その多様さは驚くばかりだ。例えば『イーリアス』のアキレウス、あの怒りに身を任せていたはずの男も実は一回笑っている。又、『オデュッセイア』では悲嘆に暮れていた最中のペーネロペイアが笑う場面もある。さらに両詩編には、一読「何故ここで笑うのか」「この笑いの意味は何なのか」理解したい不思議な、時には不気味でさえある笑いもある。

それらの笑いを各々の詩行に即して丁寧に見ていくことにしたい。両詩編に「笑い」の観点から光を当てることで、登場人物の人物像により深い陰影を与え、両詩編の持つ特質と意義をより鮮明に浮かび上がらせることが出来るかも知れないと思うのである。

A 笑いを表す言葉

ホメーロスの両詩編には「笑う」ことを表す言葉が基本的に三つある。すなわち、*meidáo*、*yeáo*、*kayáo*の三つだ。基本的にと言うのはこの三語は動詞でありその一人称単数直説法現在の形で挙げたが、人称、数、法、時に伴う変化があるのは勿論、その他様々な派生形があるからだ。例えば、接頭辞がついた *enmeidáo*、*ekyeáo* や名詞形 *yeáo* などもある。

さて、この三語それぞれのような笑いであるのか、その含意、語感こそまさしく本稿のテーマであるが、とりあえずここでは見通しを利かせる便宜から辞書上の一般的語義を掲げておこう。(英語の語義は Cunliffe "Homeric Dialect"、日本語語義は古川晴風『ギリシャ語辞典』による。)

meidáo : to smile 微笑する

yeáo : to smile to laugh 笑う、ほほえむ、嘲笑する、揶揄する

kayáo : to laugh (in exultation, self-satisfaction, derision) 大喜びする、有頂天になる

三語の間の単純な線引きは難しい。例えば、*meidáo*、*yeáo* の両方にまたがって「to smile 微笑する、ほほえむ」があり、*yeáo*、*kayáo* 共に「derision 嘲笑」を含む場合がある。しかし、笑い声については、かなりはつきりとした色合いがある様だ。すなわち *meidáo* が笑い声を伴うことはなく、逆に

kayáo は高い笑い声に伴う。*yeáo* はその中間に位置する。この三語の語源が何であるか興味のあるところだが、残念ながら必ずしも明確な解明が成されていないようだ。ただ、*kayáo* に関してはそれがオノマトペであった可能性が示唆されている。[註1]

B 「ホメーロスの笑い」とは

「ホメーロスの笑い」の表現の典拠は『イーリアス』第一歌末尾近くの神々の饗宴を叙した一節にあるとされる。夫婦喧嘩でゼウスに怒られたヘーレーを息子ヘーパイストスが杯を渡して慰める。それに続く詩行はこうなっている。

さて彼(ヘーパイストス)は他の神々皆に右回りに、甘き神酒を混酒器から汲んで注いで行った。すると消えやらぬ笑い(*áōpeteo yeáo*)が至福の神々の間に起こった、ヘーパイストスが息を切らして部屋を巡るのを見て。(『イーリアス』第一歌 597～600行)

神々の「消えやらぬ笑い *áōpeteo yeáo*」これが「ホメーロスの笑い」だ。

さて、ここで神々は何故笑ったのか、何を笑ったのか。ヘーパイストスは火の神であり、鍛冶やその他の技能に長けた

『イーリアス』で大活躍の神だが、生まれつき跛だ。そのへー

パイストスが跛を曳いている様を笑っている。「息を切らせて τούνοῦρα」の形容には跛を曳きながらいそいそ励む様が活写されている。不具を笑っていることになる。そこには現代の倫理感覚では計り難い酷薄さがある。

もう一箇所神々の「消えやらぬ笑い ἀσπετος γέλας」が登場するのが『オデュッセイアー』における詩中詩、伶人デーモドコスの歌の中だ。

へーパイストスの妻アプロディーテーとアレースが逢い引きをする。それを覚ったへーパイストスはその密会の現場を得意の匠の技で捕らえる。そして神々を「見てくれ」とばかり呼び寄せる。

幸福の授け手の神々は玄関前に立った。そこで至福の神々の間に消えやらぬ笑い (ἀσπετος γέλας) がわき起こった、知恵に富むへーパイストスの技に見入って。(『オデュッセイアー』第八歌 324 ~ 326)

密通した二人は匠の仕掛けた網にまんまと掛かっている、その様を見て笑ったわけだ。これも格調高いとはいいがたい笑いである。しかし、この色事に関わる笑いが笑いの世界の一主要勢力であることは万古不易の事実だ。【註2】

ところで上記一節に先立って笑いに言及した詩行がある。へー

ーパイストスが神々を呼び寄せる言葉だ。

父神ゼウスそして他の幸わいたもう常住の神々達よ、来て下され、笑うべき所業 (ἐργα γέλαστᾶ), あり得べからざる所業を見るために。(『オデュッセイアー』第八歌 306 ~ 307)

この ἐργα γέλαστᾶ については ἐργῶν ἀνέλαστᾶ の異文が伝えられている。前者なら「笑うべき所業」だが、後者なら否定の接頭辞 α により全く逆に「笑い事でない所業」となる。前者は第三者たる見物の神々の視点であり、後者は当事者（コキユ）たるへーパイストス自身の視点だ。現代の註釈者、翻訳者の大勢は前者をとっているが、後者もあり得る。へーパイストスは怒りに燃えていて、「笑うべき所業」と思っていないことは勿論のこと、他の神々の立場に立つ余裕もなかったことは大いにあり得るのだから。ともあれここで興味深い点は、この異文問題が、一つの事柄がある者には「笑うべき」だが他の者には逆に「笑い事でない」ものであること証していることだ。これは笑いの持つ一つの特徴だろう。

さて、所謂「ホメーロスの笑い」とは上記二例のような酷薄さやとても格調高いとは言い難い要素の中に含んだものだった。このことは銘記されねばならない。ホメーロスには所謂ヒューマニズムや神々しさの感覚の粋をはみ出した一面がある。だが

しかし同時に、ここで急いで言っておかねばならない。これは一面であってこれを以て「ホメーロスにおける笑い」を代表させるのは間違いだ。ホメーロスの笑いにはこれから見るように様々な意味合いがあり、その中には至純の人間的感情の表現である場合もあるし、不気味な深淵を覗かせる裂け目である場合もあることも忘れてはならない。

C アキレウスはどこで笑ったか

『イーリアス』の中でアキレウスは笑ったことがあるか」と問われて、「ある」と応えられる読者がどれほどいるだろうか。「はじめに」で触れたように実は一回あるのだが、怒れるアキレウスのイメージがあまりに全編を支配しているのでそれにかき消されている。

アキレウスが笑う場面は第二十三歌にある。彼が亡友パトロクロスのために催した葬送競技においてだった。馬車競技で技術拔群の本命エウメーロスが不運にも（というか、アテーネーの介入で）殿に着いたのを哀れんで、アキレウスは二等賞を与えようとする。それに対し二着だった若武者アンティロコス（異議を唱える、「それは自分のものだ、哀れむのなら別の褒美を与えたらよい、自分のものを奪おうとするなら力尽くで試みるがいい」と言つて。あの「咎なき者に対してさえずぐにも咎め立てしかねない」激情型のアキレウスに対し大胆きわまりな

い発言だ。しかし、

そのようにアンティロコスは言った。すると足速い貴きアキレウスは微笑んだ (μειλόμενος)、アンティロコス（の言）を嬉しく思つて、彼は親しい仲間であつたので（『イーリアス』第二十三歌 555～556）

と、反応は意外なる「嬉しく思つて微笑んだ μειλόμενος χαίρων」だった。アキレウスは血氣盛んなアンティロコスの若武者振りに自分自身の姿の投影を見たのだろう。この「微笑」の場面は『イーリアス』における葬送競技のもつ意義を象徴している。すなわちそれは死者パトロクロスの鎮魂であると同時に生者アキレウスの怒りの治癒でもあつた。無論この時まだアキレウスのヘクトールに対する怒りが消滅したわけではない。その後ヘクトールの遺体への残酷な仕打ちは続く。しかしこの「微笑」を一つのきっかけに、アキレウスの意識下で最終歌のブリアモスとの和解の場面の準備が始まっていたのだろうと思われる。

D 「ヘクトールとアンドロマケーの別れ」における三つの笑い

『イーリアス』第六歌の「ヘクトールとアンドロマケーの別れ」の一節は特に忘れがたい名場面だ。そこでは三つの笑いが叙されている。それを見てみよう。

D-a ヘクトールの微笑

ヘクトールは戦場に復帰するにあたって妻子に別れを告げにくる。恐らくはこれが永久の別れになることを予感している。ヘクトールは妻子と行き会い、吾子アスチュアナクスを見て微笑む。

そして彼女(アンドロマケー)は彼(ヘクトール)と行き会った、彼女に侍女が付き添っていて、懷に幼くいときない子供を抱いていた。(それは)ヘクトールの美しい星にもたぐうべき愛子だった。その子をヘクトールはスカマンドリオスと呼び、他の者達はアスチュアナクス(都の主君)と呼んでいた、ヘクトール一人がイーリオスを護っていたので。さて彼は吾子に見入って静かに微笑んだ(μειδιγεν)。『イーリアス』第六歌 399～404

ここには至純の笑いが表現されている。

404行目は

さて彼は吾子に見入って静かに微笑んだ
ἦτοι ὁ μὲν μειδιγεν ἰδὼν ἐς παῖδα σιωπῇ
[*étôi ho men meidēsen idōn es paida siōpē*]

である。単に「見て」ではなく「見入って ἰδὼν ἐς」の措辞は状

況を髣髴とさせるし、「静かに σιωπῇ」も素朴な形容ながらここでは効いている。更に、全行殊の外ε音とι音が響いているのを聴くことが出来る。この音調も「笑み」を喚起することと与っているのだろう。

D-b 笑い崩れるヘクトールとアンドロマケー

そこでヘクトールとアンドロマケーは来るべきトロイア滅亡の日を思い語り合う。そして次の詩行が来る。

そのように言いながら輝くヘクトールは吾子に手を差し伸べた。しかし子は帯良き乳母の懷の方へと、父親の姿に怯えて泣き叫びながら反っくり返った、青銅と馬毛の前立てを恐れて、兜の天辺から恐ろしげに垂れ靡くのを見て。そこで愛しい父親と母御は笑い崩れた(ἐκ δ' ἐγέλασσε)。

『イーリアス』第六歌 466～471

「笑い崩れた」と訳した ἐκ δ' ἐγέλασσε は声を上げた笑い、弾ける様な笑いであり、爆笑や破顔一笑に近い。永久の別れ、町の滅亡、考え得る最悪の事態を前にして、深刻な悲嘆の中の ἐκ δ' ἐγέλασσε。人はこういう場面でもこんな風に笑うことがある、笑うことが出来る。人間に対するとおしさが込められた一節だ。

D—c アンドロマケの泣き笑い

前の引用に続き、ヘクトールは兜を取り、我が子を抱き上げ、神々に祈りを捧げ、吾子を妻の手に置く。そこで第三の笑いが来る。

そのように言って我妻の手に置いた、吾子を。彼女は
その子を香しい懷に受け取った、涙ながらに笑いつつ
(δαρπύειν γέλῳααα)。夫はそれに気づき哀れみ、手で
彼女を撫で名を呼んで言った。『イーリアス』第六歌482、

485)

「涙ながらに笑いつつ δαρπύειν γέλῳααα」。何故「涙ながら δαρπύειν」か、夫との永久の別れを予期してだろう。何故「笑いつつ γέλῳααα」か、先ほどの吾子が引き起こした爆笑の余韻だろう。直接的にはそうだろうが、しかしこの詩句はただそれに留まらない、人の生の深いあり方に触れているようだ。究極のところ人の生は涙と笑いとの狭間にある。

さて、この妻に「気づき哀れみ」かけたヘクトールの言葉はこうだった。

どうした、そのようにあまりに嘆くものではない、というのも誰も私を定業を超えて冥界に送り込むことは出来ぬの

だから。思うに運命は誰も逃れることは出来ない、弱者も強き者も、いったん生まれたからには。さあ家に帰って自らの仕事に精を出すのだ、機織りや糸巻きに、そして侍女達に指図するのだ。『イーリアス』第六歌486、491)

このように『イーリアス』第六歌の「ヘクトールとアンドロマケ」との別れの場面は哀切を極める。そしてそこに挟まれた三つの笑いは人間的表情を活写している。この一節の人間に対する共感の深さ、観察の鋭さ、描写の的確さは比類がない。

E ペーネロペイアの笑い

『オデュッセイア』におけるペーネロペイアは悲嘆に沈んでいるイメージがある。それは『イーリアス』におけるアキレウスが怒りに身を任せているイメージに似ている。確かにオデュッセウス認知を果たした時には彼女は喜びの涙を流したのだが、それは詩編の終わり近く第二十三歌に至ってであり、しかもその後程なくして表舞台から退いている。詩編冒頭から第二十三歌半ばまで、生死分からぬ夫の帰還を待ちあぐね、厚顔な男達の求婚に苦しみ、息子テレーマコスとの微妙な関係に悩み、彼女の悲嘆は尽きなかった。

そのような悲嘆の最中、ペーネロペイアは笑っている。階上の自室で豚飼に話をしている時だった。

「もしオデュッセウスが故郷に帰ってきてくれたなら、すぐにも彼の息子と一緒に男達の横暴を懲らしめてくれるでしょうに」。そのように彼女は言った。するとテーレマコスは大きく噓をした、それは屋敷中にすさまじく鳴り響いた。ペーネロペイアは笑った (γέλαιος)。(『オデュッセイア』第十七歌 539～542)

テーレマコスは階下の広間にいる。母親の話は聞こえなかったはずだ。だが第六感だろう、噓をする。それが大噓であった故階上に達したわけだ。ここで噓が出てくるのも愉快だが、それに対するペーネロペイアの笑いも出色だ。

この「笑った γέλαιος」は、あのヘクトールとアンドロマケーの「笑い崩れた ἐκ δ' ἐγέλαιος」(『イーリアス』第六歌 471)と共通するものがある。両場面とも悲嘆の中の笑いだ。それだけではない。その原因となっているのがいずれも吾子(片やテーレマコス、片やアスチュアナクス)の邪気のない仕草(片や噓、片や泣き声)だ。邪気のない人間の自然の姿が悲嘆からの解放をもたらす。それは一瞬のことではあるのだが。「笑い」を通じた人間観察の深さにおいて、両場面は好一對をなしている。

F 不条理なる笑い

ホメーロスの中には一見理由不明の笑い、いわば不条理な笑

いが幾度か出てくる。それらを検討してみよう。

F a 「唇での」笑い

『イーリアス』第十五歌、女神ヘーレーが色仕掛けで夫ゼウスを騙し、それを見破られてこっぴどく叱られ、我が意に反した行動は許さぬ、ただじゃ置かぬぞと脅される。その直後、ヘーレーは神々の宴席に来るのだが、そこで笑う。

「全ての神々の前であなたは聞くことになるでしょう、ゼウスが言った限りの恐ろしいことを。決してないと思います、誰も心に喜ぶことは、人も神々も。まだ今は楽しく会食していますけど」。このように言って女神ヘーレーは座った。ゼウスの館中の神々は不快の念にとらわれた。彼の女神は笑った (ἐγέλαιος)、唇で、しかし黒き眉毛の上で額が和むことはなかった。(『イーリアス』第十五歌 96～103)

ヘーレーは何故笑ったのか。にわかには理解しがたい笑いだ。嬉しいから、可笑しいからではないのは勿論だが、それでは宴席の場故の社交的笑いか、あるいは余裕を示そうとしたのか。おそらくそのような表面的な理由ではあるまい。

「笑いとは緊張状態からの解放だ」とは笑いのかなり広く認められた定義の一つだ。それに反するもので一見不条理であるのだが、大きな心配や屈託を抱え、心が極度の緊張状態にある

とき、その緊張が顔に表れそういう表情になることが現実にある。「笑った、唇で、しかし黒き眉毛の上で額が和むことはなかった」というこの場面のヘーレーはそれだったのではなからうか。【註3】

F1b オデュッセウスの「サルダニオスな笑い」

オデュッセウスが老人に身を竊して宴席にいるところに、思いついた求婚者達の一人が「くれてやる」といいつつ牛の脚を投げつける。

そのように言いながら頑丈な手で牛の脚を投げつけた、籠に置いてあったのを掴んで。オデュッセウスはかわした、そっと頭を傾けて、そして心で笑った(μειλιχός)、いかにもサルダニオスな(笑いを)。牛の脚は壁に当たった。(『オデュッセイア』第二十歌299～302)

「サルダニオスな笑いを笑った(μειλιχός σαρδάκιον)」とあるが、「サルダニオスな笑い」とはどんな笑いか。σαρδάκιονはホメーロスではここだけに使われている単語で、その語源については植物名起源説、地名起源説、οἰκία(菌軋りする)と関連づける説等々入り乱れており、今ひとつ明らかでない。古川晴風の『ギリシャ語辞典』では「冷ややかな、とげのある」の訳語が与えられている。いずれにせよ、英語のsardonic⁴ フランス

語のsardonique(意地悪な、冷たい)のもとになった言葉であり、不気味な笑いであることは間違いないようだ。

一瞬オデュッセウスが悪魔的表情を見せたようにも思える。オデュッセウスという人物の持つ、そして『オデュッセイア』という作品にある、謎の深さを象徴する笑いだ。

F1c 「自らのものならぬ顎での」笑い

不気味さにおいて上記「サルダニオスな笑い」と双壁をなすのは次の笑いだろう。

『オデュッセイア』第二十歌、オデュッセウスによる求婚者達誅殺の時は近づいている。

求婚者達にアテーネーは消えやらぬ笑いを引き起こし、心を惑わせた。彼らはもはや自らのものならぬ顎で笑い(γελῶν)血塗れの肉を喰らっていた。彼らの目は涙に溢れ、心は悲嘆を思っていた。(『オデュッセイア』第二十歌345～349)

ここでは笑うべき理由はない。引用詩行に先立つ部分には「母を屋敷から追い出すようなことは出来ない」とのテーレマコスの発言があるが、何ら笑いを誘う発言ではない。しかし笑う。「肉を喰らう」のだがそれは「血塗れ」ている。笑いながらも「目は涙に溢れ、心は悲嘆を思っていた」。これらのちぐはぐさは

アテーナーが「惑わせた *παρέρταξεν*」のだから当然といえば当然だ。しかし神の介入で全てのことを説明して終わらせていいものかどうか。むしろ神の介入を要請したくなるような不気味な事実がこの世であり得ると言うことではなからうか。その不気味さの極みとも思えるのが「自らのものならぬ顎で笑い *γυφλοῖαν γελῶσαν ἀλγοφλοῖαν*」の詩句だ。底知れぬ深淵を覗くようだ。そしてこの一節に聴き手や読み手が言いしれぬ不気味さを感じるとしたら、そこにこの世に潜むある真実を予感するからではなからうか。すなわち、我々は日々笑ったり肉を喰らったりもしているが、死の影がすぐそばまで来ていないとも限らないのだから。

G オデュッセウスのもう一つの笑い

上記(Fーbの項)に挙げた「サルダニオスな笑い」ほど目立つものではないが、オデュッセウスにはもう一つニュアンスに富んだ笑いがある。オデュッセウスが『イーリアス』で偵察に出、敵の斥候ドローンを捕らえ尋問した時だ。ドローンがヘクトールに「敵情偵察に成功したら褒美としてアキレウスの馬をやる」と唆されて来たと白状する。そこで

彼に笑いかけて (*ἐμπεδῆσας*) 術策に長けたオデュッセウスは言った、「おまえの心はなんとも大それた褒美を望

んだものだな、氣象大きなアキレウスの馬などというものを。その馬は難儀だぞ、死すべき人間にとつて馴らすことも車に繋ぐことも、不死の母親が産んだアキレウス以外には」 (*『イーリアス』第九歌400～404*)

この「笑いかけて *ἐμπεδῆσας*」に込められた笑いとはどんな笑いだろうか。分不相応の高望みだから嘲笑でもあろう。ヘクトールに唆されてのことだから憫笑でもあろう。相手の愚かさに見えての苦笑の要素もある。こんなささやかな一語にもホメーロスは微妙な心の綾を描き込んでいる。

H アンピノモスの笑い……偶然の一致がもたらす笑い

求婚者の中にアンピノモスという男がいる。その男が笑う場面がある。その場面というのはこうだ。求婚者達は、旅に出たテーレマコス待ち伏せして亡き者にせんと図り、待ち伏せ隊を船で派遣する。しかしその後テーレマコスがそれを逃れ帰国したことを知って、求婚者達の首領格が「最早待ち伏せは無用引き返すよう知らせよう」と言った時だった。

全てを言い終わらないうちに、アンピノモスは船を見た、その場から身をよじって、深き入り江の中に。(乗り手達は) 帆をたたみ櫂を手をしている。そこで彼は楽しげに

笑いこけて (ἐκχεύσας) 仲間達に言った、「誰も伝令は送らなくていいでしょう、彼らは帰っていますから。神々の何方かが彼らにそれを知らせたのか、あるいは彼ら自身船が過ぎるのに気づいたのだが追いつけなかったものか」(『オデュッセイアー』第十六歌 351～357)

ここでアンピノモスは何故笑ったのか。何を笑ったのか。知らせを送る手間が省けたことを喜んでいるのか。彼がその役割だったとは語られていないから、どうもそれは理由としては薄弱なようだ。ではどうしてか。

テーレマコスが死を逃れたことを喜んでのことか。たしかにアンピノモスは求婚者達の中では最もまともで、テーレマコス殺害計画についても二度に亘って消極的態度を示している。一度は「殺害について」まず神々の思し召しを伺おう、ゼウスがよしとされるなら従うが、さもなければ中止をお勧めする」(第十六歌 402～405)と言い、又別の時には「殺害のはかりごとはいくまい、それより食事に取りかかろうではないか」(第二十歌 245～246)と言っている。彼がテーレマコス殺害に不賛成であったことは事実だ。しかしそれが笑いの直接的理由であるかという疑問だ。というのも、笑ったのはテーレマコス帰国を知った時ではなく、待ち伏せの船を認めた時だったのであるから。

あるいはアンピノモスのいささか軽薄な性格のなせるわざだ

るか。^{註4}しかし、その性格もこの場面での笑いを可能とした素地としてあったかもしれないが、直接的理由とはなし難い。そこには何かきっかけがあったはずだ。

この一節における「笑い」は偶然の一致が喚起した笑いとなるのが良さそうだ。「噂をすれば影」という言葉がある。思いがけない一致、タイミングよい符合、そういう場合思わず笑いがこぼれることがある。「言い終わらないうちに、ちょうどその時 οὐ τῶν πᾶν ἐρηθ', οὐ δῆ」や「その場から身をよじって στρέφεις ἐκ χύπης」からは、そういう呼吸が感じられる。

この一節については更にこのようなことを感じさせられる。そもそも詩人がこの一節を描いたのは、人にこのような場面で、偶然の一致が引き起こす笑いがあり得ることに興味を持ったからではなからうか。というのも、待伏隊派遣が不首尾に終わったことまでは語るに相応しいにせよ、「最早待ち伏せは無用、引き返すよう知らせよう」とまで言わせる物語上の必然性がないからだ。この一節の主眼はアンピノモスの笑いにある。ホメーロスは笑い研究家、あるいは笑いを通した人間観察家でもある様だ。

Ⅰ ゼウスと求婚者達共通の笑い……「争い見物好み」

『イーリアス』第二十一歌において、河神クサントスと火の神ヘーパイストスとの戦いがようやく収まった後、他の神々

の間で諍いが起こる。アカイア最貞組とトロイア最貞組の激突だ。

他の神々の間に激しく厳しい諍いが起こり、彼らの心は二様に湧き立った。大きな騒音と共にぶつかり合い大地は揺れ、宏大な天空は鳴り響いた。オリュンポスに座してゼウスはそれを聞き、そして彼の心は喜んで笑った(ἐξέλασσε)、神々が諍いへと突進するのを見て。(『イーリアス』第二十一歌 385～390)

ゼウスはこの時何故笑ったのか。別に可笑しくて笑ったわけではあるまい。

また、『オデュッセイアー』には次の一節がある。オデュッセウス扮する老人と浮浪人イーロスが喧嘩し拳闘で決着をつけようとした時だ。

このように二人は高い扉の前、磨かれた敷居の上でいきり立って言い合った。それを剛毅のアンティノオスが聞いて楽しげに笑い(ἐγέλαισε)求婚者達に言った。「仲間方、これまでこれほどのことがおこっただろうか、この家に神がこれほどの娯楽をもたらして下さった、あの客人とイーロスが喧嘩して腕力で戦うのだ、さあ早速やらせようではないか」。このように言くと、皆は笑いながら

(ἐγέλαισε)立ち上がり、ボロを着た乞食達の周りに集まった(『オデュッセイアー』第十八歌 34～42)

更に、少し先でイーロスがオデュッセウスに打ちのめされた時に見物の求婚者達は「死ぬほど笑い」(γέλοι ἐκβαλον) (第十八歌 100)もいる。

アンティノオスは何故笑ったのか。また他の求婚者達も何故笑ったのか。やはり別に可笑しいことがあったわけではなからう。

神々の争いを前にしたゼウスの笑い、二人の浮浪人の争いを前にした求婚者達の笑い、この二つの笑いの奥底には或る共通項がある。即ち、当時のギリシア人達に顕著だった争い見物を好む気持からだ。〔註5〕そのことは『イーリアス』における葬送競技、『オデュッセイアー』における弓競技、更にはその後続くオリンピックの伝統にも窺える。そこでの笑いは争い見物への期待にはしゃいでの笑いだろう。

そしてここでも『イーリアス』の本歌取りを『オデュッセイアー』に読み取ることが出来そうだ。すなわち前者のゼウスが後者では求婚者達に、神々が浮浪者に置き換えられている。この高貴から卑俗への転換も両詩編の特徴を物語っている。しかし底に共通に流れているのは「争い見物好み」の心性だ。

J アイアースの笑い……武者震いとしての笑い

ヘクトールがアカイア勢に向かって「誰なりと拙者と一騎打ちをせんと思う者は立て」と挑んだときだ。皆最初は躊躇したものの、ネストールの促しに何人かが名乗りを上げ、簀でアイアースが当たったのだった。

アイアースは輝く青銅の兜を被り肌には鎧一式をまとい終えて、巨軀のアレース神の如くに躍り出た。その神は男共の戦いの場へと赴く、その男共をクロノスの御子が闘争心を掻き立て命を蝕む戦いへと率いていくのだ。その如くにアカイアの守り手巨軀のアイアースは進み出た、獐猛な顔に笑みを浮かべて (*meilōv*)、下では大股に歩を進めながら、影長き槍を振り回しながら。〔イーリアス〕第七歌 206
(213)

「獐猛な顔に笑みを浮かべて *meilōv* *phōpōion* *proōwton*」とある。これはどのような笑みなのか。

面白可笑しい場面ではないし、かといつて自ら戦闘に向かうのだから前項アンティオスの場合のように諍いや格闘技「見物」の期待があったわけでもない。ここでは *phōpōion* との対照に着目する必要があるようだ。*phōpōion* は原義不明の語だが *leaf* などには *shaggy* (毛深い) の語義が与えられてい

る。そこから「恐ろしげな、剛勇な、獐猛な」の意味も派生する。アイアースはヘクトールの挑戦に対しすぐは名乗り出なかったものの、決して尻込みしたわけではなかった。その後の言動は自信に溢れている。ここ「笑い」はそんな自信に溢れた勇者が、自分の真価を発揮出来る場に臨んだ時の「武者震い」の様なものではなかったろうか。嘔み殺そうとしても嘔み殺しきれない不敵な笑いだ。そのような笑いもある。

K アテーネーのオデュッセウスへの微笑み

女神アテーネーがオデュッセウスに微笑みかける場面がある。オデュッセウスが故郷イタケーに帰還し、若者(実はアテーネー)に出会う。オデュッセウスは例によって身分を偽り、ここに到った次第について嘘八百を並べる。そこでアテーネーが微笑む。

そのように彼は言った、すると輝く目のアテーネーは微笑み (*meilōseu*) 彼を手で撫でた。(『オデュッセイアー』第十三歌 287-288)

この微笑みはどのような笑いだったのか。それを探るようになるかと思われるので、そこでアテーネーがオデュッセウスに掛けた言葉を読んでみよう。

よっぽど悪賢く抜け目のない人でしょね、あなたを出し抜く人は。あらゆる策略において、神でさえ太刀打ちはなかなか（かなわない）……。しかしさあ、そのようなことを言い合うのは止めにしましょう、私たちは双方策略に長けているのですから、というのもあなたは全ての人の中で最も謀と弁舌に秀で、私は神々の中で知恵と策略に（秀でているのですから）。分からないのですか、私があらゆる困難において常にあなたの傍らにいて護っているゼウスの娘パッラス・アテーネーだということが。（『オデュッセイア』第十三歌291～301）

ホメロス世界にける神と人間との結びつきで、およそアテーネーとオデュッセウスの間の結びつきほど緊密な例は他にない。それは通常の神と人間の関係を超えている。アテーネーの加護振りは尋常でない。母の如く、パトロンの如く、更には同志の如くオデュッセウスに接している。この一節ではアテーネー自身の口からそれが余すことなく語られている。

ここでアテーネーは、自分を騙そうとする振る舞いに彼らしさを認める。オデュッセウスをとことん舐る故に彼らしいものはすべて好もしく、その存在を確認することは嬉しいのだ。その嬉しさに（相手が他ならぬアテーネーであることを気づかないでいたオデュッセウスへの）若干の揶揄が加味された微笑みだったのであろう。

L パリスの高笑い

次のパリスの高笑いはどうだろう。比喩が少し長いが、この笑いの性質見極めに資すると思われるので省略なしで引用する。

パリスも決して高き家にのろろしてはいなかった。青銅で煌めく鎧をまとうと速き脚に恃んで町を通って馳せ向かった。あたかも、既につながれていた馬が飼葉桶に飽いて、綱を引きちぎって蹄の音高く野原に駆け出していく、良き流れの河で水浴びすることに慣れて、輝いて、高く頭を掲げ、周りには鬣が肩に降り掛かる。栄光に恃んで膝がその馬をいつもの牧場へと運んでいく。その如くにプリアモスの子パリスはベルガモスの頂から鎧を輝かせて太陽さながらに進んでいった、高く笑いながら（καυχόμενος）、早き脚が（彼を）運んだのだ。たちまちにして兄ヘクトールに追いついた。（『イーリアス』第六歌503～515）

豪傑の笑いだ。上記一節中「恃んで」の語が二回出てくる。自信に満ちた豪快な笑いだろう。比喩の馬はその笑い声が馬の高い嘶きにも似ていることも示唆している。

『イーリアス』には同様の καυχόμενος の例がもう一回出てくる。オデュッセウスがディオメデースと共に敵情偵察に出て、敵の一团を殲滅し、名馬を獲て帰還する。そしてオデュッセウ

スはその次の次第を皆に報告する。それに続く詩行だ。

そのように言いながら、単蹄の馬をして濠を渡らせた、高く笑いながら (καυχόμενος)。他のアカイア人達も喜びに満ちて進んだ。(『イーリアス』第十歌 564～565)

成功を誇る高笑いだろう。

ところで後者オデュッセウスの例は彼の日頃の勇者振りからして、またその時の偵察での成果からして、καυχόμενοςは成る程と思われるのだが、前者パリスの例は今ひとつ腑に落ちない。というのはパリスは『イーリアス』においてそれほど豪傑のイメージがないからだ。いっぽしの弓使いではあるが『イーリアス』において弓はどれも低く見られていた感がある。それに上記引用の場面の直前にはいかにも懦弱なパリスが描かれていた。すなわち、パリスはメネラーオスに一騎打ちを挑んでいたのだが、メネラーオスに圧倒されもはやこれまでということところを逃れ出たのだ。あまつさえ逃げだして闘事にかまけたあげく、のんびりと武器を磨いている。そこでヘクトールに

「ろくでなしのパリス、格好ばかりの女たらしよ、口先男よ。お前など生まれてこず娶ることもなく死んでしまうべきだったのだ」(『イーリアス』第三歌 39～40)

とまで言われている。このようなパリスには上記引用のκαυχόμενοςの一節は相応しくないように思える。

そこで想起されるのが、『イーリアス』以前に、すなわちアキレウス主人公の物語以前に、パリス主人公の物語があったのではなからうかという説である。^{註6}パリスがメネラーオスの妻を奪う。それが戦禍を惹き起す。トロイア人達はパリスを面罵する。それに対してパリスは怒る。戦線離脱する(アキレウスのように)。アキレウスがトロイアを陥落寸前まで追い詰める。パリスが再び立ってアキレウスを倒す。トロイアを窮地から救う(それもアキレウスの場合のように一時の事ではあるが)。このような筋の「勇者パリス」の物語である。そのようなパリスであれば上記引用のκαυχόμενοςの一節は相応しい。『イーリアス』の詩人によってパリスはその懦弱な面が強調されることとなったが、この一節はホメーロスに先立つ「勇者パリス」の物語の名残ではなからうか。

M 乳母の高笑い

καυχόμενοςは「喜び勇んだ笑い、高笑い」とされる。『イーリアス』における典型的用例は前項で見た。武張った戦場でこそ相応しい笑い、豪傑の笑いだ。

ところが『オデュッセイア』では意外なところでこのκαυχόμενοςが使われている。

老婆はからからと笑いながら(*kayxalōwōa*)階上へ上がっていった、奥方に愛しいご主人が婦館なさっていると伝えようと。膝は動いた、足はよろめいた。そして(奥方の)枕元に立ち彼女に声をかけて言った。(『オデュッセイアー』第二十三歌 1~4)

オデュッセウスが求婚者達討伐を果たしたのを見て、老婆エウリュクレイアがペーネロペイアに報告に行く場面だ。

エウリュクレイアは、オデュッセウスの乳母だったのだから、かなりの高齢だろう。その老婆が「からからと笑いながら*kayxalōwōa*」階段を駆け上がる。

膝は動いた、足はよろめいた

yoūwata δ' ἐπρώσσαντο, πόδες δ' ὑπερικταίνοντο

[*gúnata d'erōsanto, podes d' hyperiktainonto*]

という対句的詩行の語調からは、老体を顧みず、よろめきつつも喜び勇んで駆け上がろうとする姿が浮かんでくる。その姿に*kayxalōwōa*が呼応している。枕元では息を切らして報告したのだろう。

『イーリアス』では戦場用語であった*kayxalōwōa*が『オデュッセイアー』では老婆に使われている。『イーリアス』が戦時の詩であるとすれば、『オデュッセイアー』は平時の詩だ。細部ではあるがここにも『オデュッセイアー』の特徴が見てとれる。あるいは『オデュッセイアー』の詩人は『イーリアス』の詩人へ

の対抗意識があったのかも知れない。そして両詩編が同一詩人の作であるなら、詩人は自らを更新し新機軸を(あるいは新感覚を)盛り込んだものだろう。

N テルシテースと笑い

ホメーロスの笑いについて考えるにあたっては、『イーリアス』第二歌で登場しその後すぐ姿を消す異色の人物テルシテースにも触れなくてはなるまい。

容貌醜悪なその男はアガメムノンに毒づき、皆に故郷への帰還を呼びかける。その男は詩人によって

テルシテースまだまだ一人わめき散らしていた。その男は心の中に脈絡のない沢山の言葉を持っていた、無意味に、脈絡無しに諸王に向かって喧嘩しかけるべく、アカイア人に笑いをとれそう(*telosion*)に思えることならなんでも。彼はイーリオスに來たもつとも醜悪な男だった。(『イーリアス』第二歌 212~216)

と紹介される。

telosion は勿論 $\tau\epsilon\lambda\acute{o}\varsigma$ (笑う)に由来する「笑うべき」の意の形容詞であり、現代風にいえばさしずめ「笑いをとれそう」なだろう。

そして更に、いかに醜悪か具体的描写が続く。曰く「蟹股で、片足跛で、肩は胸の上にのしかかるような曲がり、頭頂は尖り僅かに毛が生えていた」と容赦ない。その男がアガメムノーンに対して悪態をつく。要約すると「沢山の財や女達を持つていながらまだ足りないのか。お前さんより強いアキレウスから又女を取り上げるとは。さあ皆帰ろう。それにしてもアキレウスは暢気なものだ、さもないければお前さんが侮辱するのもこれが最後となろうに」と。悪態と言ったが、こう要約してみると実はどうして、結構的を射ている。しかも、第一歌でアキレウスがアガメムノーンと喧嘩別れしたときアキレウス自身が放った言葉に中身はそっくりだ。

しかしすぐさまオデュッセウスが割って入り、「卑しい分際で王にたてつくな」としかりつけしたたか打擲する。

このように彼（オデュッセウス）は言って、錫杖で背中と肩を打ち据えた。彼（テルシステース）はのけぞりどっさりと涙を流した。充血した瘤が背中から浮き上がった、黄金の錫杖の下で。彼は怯えて座り、苦しみに呆然として涙を拭った。彼等（アカイア人達）は悲しみながらも彼（テルシステース）を見て楽しげに笑った（*γέλαιον*）（『イーリアス』第二歌 265～270）

最後に *γέλαιον*（彼らは笑った）が来ている。

さてテルシステースは何故ここで登場したのか。詩人は何故ここで彼を登場させたのか。勇士揃いの登場人物の中にあつて、一兵卒で名を与えられているのは彼一人である。そのことを勘案すると、名もなき兵士達の本心を彼をして語らせたのだろう。そのことは「彼等（アカイア人達）は悲しみながらも」からも窺える。兵士達の多くは内心帰還を望んでいた、彼らの代弁者の声が封殺されたことを悲しんだのだ。

テルシステースのアガメムノーンに対する言葉は、分際を超えたものではあったとはいえ一理あるまっとうなものであり、*γέλαιον*「笑いをとる」類いのものではなかった。普段はどうか分からぬが少なくともこの時、彼は受けを狙ってアガメムノーンに楯突いたのではなかった。しかし結果として彼は笑われた。自ら痛い目に遭って、自らの身を犠牲にして。「笑いをとれそうに思えることならなんでも *οἱ εἰς αὐτὸ γέλαιον*」と思っていたのだから、本願成就したことになる。詩人は時として皮肉で残酷だ。

○ 大地が笑い輝く

大地が *γέλαιον* する箇所がある。

あたかもゼウスの雪が頻りに降り注ぐ如くに、大気から生まれた北風にあおられた冷たい雪が、その如くにその時多

くの兜は光り輝いて船から繰り出した、臍付きの桶も頑丈な胸当ての鎧もトネリコの槍も（繰り出した）。輝きは天空に達し、あたり一面青銅の光のもので大地は笑い輝き（γέλασος）、下からは男達の足音が起こった。その真ん中では貴いアキレウスが兜を着けた。（『イーリアス』第十九歌 357～364）

「笑い輝いた」と訳語をあつた語は γέλαα の活用形 γέλασος だ。γέλαα には「笑う」と並んで「輝く」の意味もある。

さて、γέλαα が「笑う」と「輝く」の両義を表すということは何を語っているだろうか。もし「笑う」が原義であるなら、「大地が笑う」「海が笑う」のような表現によつて大地や海が擬人化されていく過程で「輝く」の語義を獲得していったのだろう。他方「輝く」が原義であるなら、人間の笑いが「擬自然化」されていく過程で「笑う」の語義を獲得していったことになる。近代的な詩的感覚から言えば前者の方が馴染みやすいが、後者の方がより古代の言語感覚に即しているようにも思える。^{〔註7〕}

いずれにせよそこには人間と自然との境界を超える感覚が働いている。「輝いて」いる物は物である以上「笑う」はずもない。「笑い」は声と表情によつて現れるが、声や表情が物理的に「輝いて」いるはずもない。輝きを笑いと捉える、あるいは笑いを輝きと捉える、そこには人と自然とを相互翻訳する感覚が働いている。そしてこの感覚こそが、ホメーロス独特の比喩、就中

人間の行動が自然現象に喩えられる数多の比喩、を生み出した源であるに相違ない。

P 笑われていないこと

これまで両詩編で「笑い」の語が登場するいろいろな場面を見てきた。多様な笑いがあつた。しかし翻つて、両詩編で笑われていない笑いがあるのではないか、それをここで考えて見たい。

P a 言葉の機知

現代の笑いで大きな柱を成す一つに言葉の機知、いわゆる言葉遊びがある。洒落とか、掛詞とか、地口とかいわれるものだ。ホメーロスの笑いにはこれがない。言葉の機知がないという意味ではなく、それが詩編の中で笑いの対象となっていないのである。

ホメーロスにおける言葉の機知、これはむしろ豊富だ。詩人の得意とするところであつたかと思われるくらいだ。例を挙げよう。

P a iイ ὄχος(苦惱)と ἄκος(救済)

オデュッセウスが和解使節としてアキレウスに対し熱弁を揮つて戦列復帰に向けた説得を試みる。その中に次の一節がある。

「立ち上がってくれ、遅ればせながらではあっても疲弊したアカイアの子等をトロイア勢から救う気があるなら、

そなた自身に後々苦悩があるだろう、起こってしまった災難の救済を見いだす何らの手段もなくなる、それより前に『イーリアス』第九歌 249～250)

考えてくれ、どうやってアカイア勢の悲しき日を防ぐかを」

この二つの詩行において、*áchos* (苦悩)と*ákos* (救済)が韻律上全く同位置に置かれている。すなわち、

*avtō toi metōtiθ' áchos éssetai, oúdē ti mīchos
pēxénros kakōv ést' ákos eúpeiv: álla polū prōv
[autō / toi meto / pisti ákhos / essetai / oude ti / mékhos
rekhthen / tos kakū / est' ákos / heurēin / alla po / lyu
prin]*

と、同位置の類似音の二つの語が、片や結果「*akhos* 苦悩」であり、片やその原因「*akos* 救済(の否定)」である。ひょっとしてそこに説得の鍵があるかもしれない、とのオデュッセウスの思いがこもっているような措辞だ。

P—a—o Πάτροκλος (パトロクロス)と

Kleopatra (クレオパトラー)

これもアキレウスの戦列復帰に向けたポイニークスによる説得の中に出てくる。ポイニークスは先例を挙げて復帰すべきことを説く。かつてメレアグロスという英雄が祖国防衛の任務を放棄して妻の傍らに引きこもった。

彼は愛しい母親に対して心で怒り、美しい妻クレオパトラー(*Kleopatra*)の傍らに臥していたのだった。『イーリアス』第九歌 553～556)

その結果どうなったかというと、最後はその妻の説得で立ち上がったものの時既に遅く、名誉を得ることは出来なかった。このクレオパトラー(*Kleopatra* [*kleopatre*])はアキレウスの僚友の名パトロクロス(*patroklos*)のアナグラムであり「もじり」だろう。メレアグロスにとってのクレオパトラーはまさしくアキレウスにとってのパトロクロスだ。*Kleopatra* = *patroklos* は単なる言葉遊びでは済まされない、詩編の骨格を浮かび上がらせるアナロジーとなっている。

P—a—h 名と殺され方

アキレウスがトロイアの武将を次々と斃していく場面に次の一節がある。

……次いでムーリオスの傍らに立って突いた槍で耳を。そのまま刺し貫き他方の耳から出た青銅の刃が。次いでアゲーノールの子エケクロスの

頭の真ん中を東よき剣で斬りつけた。『イーリアス』第二十歌 472～475)

……ὁ δὲ Μούλιον οὐτά παραστιάς

δοῦπὶ κατ' οὐς εἰσάπ δὲ δι' οὐartos ἡλθ' ἐτέροιο

αἰχμῇ χαλκείῃ· ὁ δ' ἄγχινορος υἱὸν Ἑχέλον

μέσσην καὶ κεφαλὴν ἔλγει ἦλασε κοπτεντί,

Μούλιον(Mulion ムーリオス)は οὐς(うす)を δοῦπὶ(だうぴ)槍で οὐτά(うた 突き)ぬかれる。Ἑχέλον(Ekheklon エケクロス)は κεφαλὴν(kephalēn 頭)を κοπτεντί(kópēnti 東よき)ἔλγει(kisphēi 剣)で斬りつけられる。殺され方が名前の音によって運命づけられているかのようだ。

P a a 二 「イーロス非イーロス」

オデュッセウスが身を窺して自らの館に居る。そこにもう一人の乞食イーロスがやって来る。イーロスはオデュッセウス扮する乞食老人を商売敵と思ったか、追い出しにかかる。そこでオデュッセウスは「俺をあまり怒らせると血を見ることになるぞ」と言う。それに対してイーロスはでは「やってやろうじゃないか」とばかりいきり立ち、拳闘で決着を図ることになる。

オデュッセウスが禪を締めると、遅い筋肉が露わになる。それを見て見物の求婚者達が言う。

まったく、イーロス非イーロスは、すぐにも自ら招いた禍を蒙ることになるぞ(『オデュッセイア』第十八歌 73)

ἦ τάχα Ἴρος ἄϊρος ἐπίσταστος κακὸν ἔξει,

「イーロス非イーロス」は日本語になっていないが、語頭の A は否定の接頭辞だろうから原文 Ἴρος ἄϊρος [iros airos] の直訳だ。言わんとしていることは「イーロスは散々にやつつけられて原形を留めなくなる」ということだろう。ἄϊρος 自体に固有の意味があるわけではないが、Ἴρος ἄϊρος と並んだ表現が洒落であると同時に託宣のようでもある。

P a a 本 「誰もおらぬ Oυτις」

これは『オデュッセイア』の漂流譚中白眉ともいうべき挿話だ。オデュッセウスは隻眼の巨人ポリュペーモスに名をきかれ、偽って私の名は「誰もおらぬ Oυτις」だと応えていたのだ。そして巨人がオデュッセウス達によって目を潰され、仲間の助けを呼ぶ。仲間達は「誰かがお前を殺そうとしているのか」と訊ねる。その時巨人はこう応える。

おお仲間達よ、暴力でなく悪企みで俺を殺そうとしている

408
のは「誰もおらぬ *Oûn*」よ（『オデュッセイア』第九歌）

それを聞いた巨人の仲間達は「独りでいるお前に乱暴するものが『誰もおらぬ』とすれば（定めし病気であろう）、宏大なゼウスがもたらす病気はどうにも避けようがないから親父のポセイドオンにでも祈るのだな」と言い置いて帰ってしまふ。

名前が「誰もおらぬ *Oûn* [*itis*』とは、なんとも機知に富んでいる。名前とは誰かがいることの証であるはずのものが、それが「誰もおらぬ *Oûn*」であるという諸誰だ。来るべき危険を避ける悪智恵としても出色だ。そして更に、この詩編の一貫した主題である「誰か」の問いに対する主人公オデュッセウス自身による意味深長な答でもある。

以上五つの場面で笑いは起こっていない。あれだけ多様な笑いを描いた詩人が、どうしてこれらの場面で笑いを起こさなかったのだろうか。その理由を考えて見る。

第一と第二の例は、いずれもアキレウスに対する必死の説得の言葉の中にあり、その場にいた者が笑うにはあまりに深刻な状況下にあった。

第三の例は、戦闘の描写の中にあり笑い手がいなかった。

第四の例では、求婚者同士の会話の中なのだから彼らの間に笑いが起きてよさそうだし、事実そうだったのかも知れぬが

そうは語られていない（理由不明）。

第五の例では、たしかにその直後にオデュッセウスが心中笑っている。「（巨人の仲間達が）立ち去った時、私の心は笑った（*ἐγὼ δαίω*）、私の名と非の打ちどころなき策略がまんまと騙しおおせたので」（『オデュッセイア』第九歌413〜414）。しかしその笑いは、策略が上首尾に終わったことによる「してやったり」の笑いであり、言葉の機知に対する笑いではなかった。周りの部下達に笑う余裕はなかったろうから、これもやはり笑い手がいなかったと考えるべきだろう。

このように上記五つの場面は笑われていないのだが、しかしこれらの詩行は本当に笑いに無縁なのだろうか。語り手が、詩人が詩編の中で「笑い」を叙さなかったことは確かだ。しかしそれは、聴衆・読者が笑わないことは意味しない。これらの詩行を耳にした聴衆、読んだ読者は声に出さないにしろ心の中でニヤリとしたり微笑んだりしたのではなからうか。テキスト上の詩編では笑われていないが、聴衆や読者の存在も含めた開かれた詩編世界においては、言葉の機知は存分に笑われている。^{〔註8〕}

P1b 滑稽（アザラシの挿話）

機知と並ぶ重要な笑いの要素、滑稽についてもホメーロスは長じていた。そのことは『オデュッセイア』中のアザラシの挿話にもみられる。その場面はメネラーオスが自分の帰還の経

緯をテーレマコスに語った話の中だった。これも詩編では笑われていないのだが、聴衆、読者の笑いを誘ったに違いないと思われる。

自分の帰還を妨げているのはどの神か。メネラーオスは、それを知るには「海の老人」と呼ばれる神を捕らえ彼から聞き出すのがよい、と女神から助言される。ただし、捕らえるのは彼が沢山のアザラシと共にする習わしの昼寝時がいいのだが、そのアザラシは

深海の鼻を衝く悪臭を吐き出している（『オデュッセイアー』第四歌406）

と教えられる。「鼻を衝く」と訳した *τικρὸν* は「鋭い、苦い、容赦ない」という意の形容詞で、これは現代のアザラシの生息に詳しい専門家の証言のとおりだ。

勿論メネラーオスは、帰還のためには背に腹は代えられないと、忠告に従ってアザラシになりますことにする。すなわちアザラシの剥いだばかりの皮を被って伏し、「海の老人」の寝込みを襲おうと待ち構える。

しかし案の定、

それはとんでもない待ち伏せとなるところであつた、というのほとんどと海育ちのアザラシの世にも凄まじい悪臭に

参ってしまったので。（『オデュッセイアー』第四歌441）
442）

「*αἰνός*とんでもない」に「*αἰνός*はとほとほ」、そして加うるに「*ὀλοῦν*たる凄まじく」。自虐的修飾語を繰り返して滑稽の度を高めている。

詩人はこれらの詩行で聞き手テーレマコスが笑ったとは言っていない。とはいえ詩編の聴衆、読者は笑うだろう。それもここは、前項の機知の場合のような微笑 *μικρὸν* ではなく、声を上げた笑い、*γέλας* か *καγέλας* であるに違いない。

おわりに

「笑い」とは何か。この問いは古代ギリシア以来現代に到るまで多くの英知の人を悩ませ途方にくれさせてきた。（註9）

ところがこの「笑い」は古今東西、老若男女、赤子に至るまで誰でも、その機会さえあればたやすく実践している。生きることは易くしかし認識すること難き現象の最たるものだ。

では動物はいかにいうに、人以外の動物は笑わない。「怒る」ことは動物にも勿論ある。「泣く」ことも、「鳴く」あるいは「啼く」と言われるように人以外の動物にもありそうだ。アキレウスの馬は、神馬故ということもあるが、バトロクロスの死を悼んで喉から熱い涙を流している（『イーリアス』第十七歌437）

438)。それに引き換え「笑い」は人ならではのものだ。

我々人間固有のこの「笑い」という不思議な現象、黎明期の詩人はその謎に魅入られたのではなからうか。詩人は両詩編の中でそれを興味深く眺め、味わっている。

「怒りを歌え」と語り出した詩人は「笑いをも歌った」のだった。そしてそれらの場面に我々聴衆、読者がつられて笑うならば、それを知った詩人はおそらくは「嬉しく微笑む *ieiðaw* *xeipaw*」ことであろう、アキレウスが自らの投影を認めてアンティロコスに対してそうしたように（『イーリアス』第二十三歌 555～556）。

註

【1】 P. Chantraine “Dictionnaire étymologique de la langue grecque” では *kayxaláw* の語源に *ixwixwix* 記述されている：「表現力に富んだ古い言葉であり、オノマトペーに基礎を置く同音反復を含む言葉であると思われる」。

筆者にも *kayxaláw* がオノマトペに由来することは大いにあり得ると思われる。*kayxaláw* [kankhalaɔ] は高笑いの声「カンラカラカラ」を呼び起こす。そして *yeðáw* [geɬaɔ] についても普通の笑い声「ゲラゲラ」と無関係ではなからう。それでは *ieiðáw* [ieiðaɔ] はどうか。*ieiðáw* には笑い声がない

のだから擬声語ではありえない。しかし擬声語ではないにしても一種の擬態語、更には身振りによる模写ではなからうか。すなわち *ieiðáw* [ieiðaɔ] の音が「微笑み」の姿を表現し、更にはこの語を発声するときの口や頬の形が「微笑み」の表情を作り出している、そんなことはないだろうか。日本語で「ニコリ、ニヤリ」や「笑み」にも同様のことがありそうだ。

【2】『古事記』の「天の岩戸」のくだりには、天宇受賣命（アメノウズメノミコト）が肌を露わにして踊ったとき「爾高天原動而、八百萬神共咲…ここに高天原動（とよ）みて、八百萬（やはよろず）の神共に咲（わら）いき」とある。この日本神話における天照大神の「天の岩戸」の物語はギリシア神話におけるデーメーテルの物語と比較されることが多い。確かに、天照大神の「天の岩戸」籠もりのもたらした闇は、豊穡の女神デーメーテルの不在がもたらした飢饉との共通性を感じられる。しかし「笑い」の観点、すなわち笑いの理由、笑い手、起こったであろう笑い声などからいうと、「天の岩戸」の場面は本文引用の「アプロディーテーとアレースの違い引き」場面との類似が際立っている。

【3】 このペーラーの「唇での笑い」について W. Leaf は “Homer: The Iliad” で「強いられた笑いは目や眉によりも唇に遙かに容易であることは周知のことである」と註記している。日本語で「引きつった笑い」とか「笑ったが目は笑っていないかった」といわれる表情がある。それだろう。

【4】 A. Hoekstra は “A Commentary on Homer's Odyssey” Volume II のこの場面に関連して「アンピノモスは求婚者達の中で最も easy-going な男である」と註記している。本文引用のテレーマコス殺害計画に対する態度にしる、オデュッ

セウス扮する老人に対するお世辞（第十八歌122～123）にしろ、なるほど彼には日和見主義的なところが顕著だ。

【5】 J.W. Hewitt は “Homeric laughter” (The classical journal, 1923) でこう述べている: 「ギリシア人達は争い (struggle) を見て大いなる喜びを感じたものと思われる。……その喜びは我々アメリカ人にはよく理解出来るところである」。その気持ちは程度の差こそあれギリシア人、アメリカ人でない我々にも理解出来る。人間に備わっている闘争本能故だろうか。

【6】 『ギリシア叙事詩の誕生』（松本仁助、世界思想社、一九八九年）で著者は、『イーリアス』の古い層として、トロイア軍にとって不可欠の「勇者パリス」の存在を想定している。なお、本稿では「笑い」の観点から同書の「勇者パリス」説を援用しているわけだが、筆者は既に同説について「怒り」の観点から触れたことがある。（『言語文化』明治学院大学言語文化研究所二〇一二年所収「アキレウスの怒り・再考」）

【7】 *Yagel* が「笑う」と「輝く」の両義を有することは、「ゲラゲラ」と笑い「キラキラ」と輝く日本語の感性に通ずるものがある。

俳句の春の季語に「山笑う」がある。春の山の明るい様子という。更に、「えむ（ゑむ）」には「笑む」と「咲く」の両義

がある。そして、顔も花も「ほころぶ」。これらにも人間と自然との境界を超える感覚が働いている。

【8】 この点については笑いの世界の次の事実が思い合わせられる。現今のメディアに跋扈するお笑いとは笑いをとろうとする当事者とそのスタジオにいるタレントが先ず笑う。それどころか笑うのはスタジオだけで、視聴者はしらけていることさえままある。しかし嘶家やジョークの達人は自らはめったに笑わないものなのだ。

【9】 ベルグソンの「笑い」（1900年）に次の一節がある。

「笑いとは何を意味するか。笑いを誘うものの根柢には何があるか。……思想家達がこのちっぽけな問題と取組んできたが、この問題はいつもその努力をくぐり抜け、すりぬけ、身をかわし、またも立ち直るのである。哲学的な思索に対して投げられた小癪な挑戦というべきだ」（岩波文庫、林達夫訳）

訳者は原文 *impertinent défi* を「小癪な挑戦」と訳している。原文も言い得て妙なら、訳もエスブリが利いている。しかしその「小癪な挑戦」に対する知性側の対応状況如何というに、当のベルグソンの犀利な考察にも関わらず、そしてその後一世紀の様々な解明の試みにもかかわらず事態はあまり進展していないようだ。